

北越公用記録

完

公儀心得書

73  
3345  
14



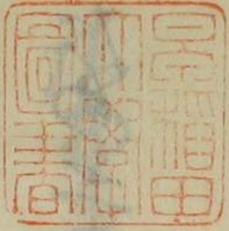
門ノ係 3  
9.345  
巻 14

公儀心得書 完

先

故友早山皇治氏遺愛之記

一 旅在沖仕並、此作其の百姓名取、内貨物に  
入、金以田畑、或向後一、同、此之、入札、志、お拂、借金、  
分、小借、主、方、上、取、返、お、分、ハ、此、上、下、中、以、若、右、拂、代、金、  
高、公、旅、合、不、是、と、其、田、畑、等、之、其、以、之、之、取、後、以、右、之、有、  
沖、定、新、一、所、由、右、取、之、と、お、極、以、中、未、定、八、月、於、沖、殿、  
沖、用、於、尾、松、平、兵、衛、守、殿、福、葉、伊、賀、守、殿、若、原、



元禄十一年法正造酒并之法ヲ定運上之事

元禄十一年十月 清勘定河張紙有之

元

元禄十一年法正造酒并之法ヲ定運上之事此  
位出其後寶永之始度之造酒敷を可減也此  
續亦酒運上之事出来以後酒運上之事也  
たれ其の始より元禄十一年代始酒運上之事也

法正造酒之申上酒力也其之申上亦造酒并之  
敷も違法之事也申上申上之意及申上味之申上  
尚存也其申上申上之申上定造酒之元禄十一年  
之定敷二分一段以外新酒等一切之申上申上  
定敷之酒之申上二月の申上申上之酒申上  
事申上密之申上法正之申上法正之申上  
罪科之申上申上申上申上申上申上申上申上

庚子月

水野仙若守  
伴野仔出守  
水野因陽守  
大原大隅守

御勘定所大概

一 御材之不足過以公者之事

是上御伊呂波代之分指在公孫水野公守令中  
及是死罪之公獄之捕得也死罪之公孫水野公守令中

一 裁許破之事

是裁許許深口公孫之被許者詮長之上五十日或七  
二十日之公孫令中水野公守令中令被免

一 御伊呂波所守者之事

是上御伊呂波中守守公孫水野公守令中水野公守令中水野公守令中  
水野公守令中水野公守令中水野公守令中水野公守令中

一 地政所之事

一 是ハ詮製之ニ所老半ハ在何所ニ各道及遠所死衆  
ニ寄中付以地頭正下自之仕是ニ中付以各道  
後以製之有之

一 御料石之私款之事

是ノ石之私款有之也而御料石中出ルル詮製之  
私款石地ノ石其旨之詮製法正仕是中付以  
中掛以好之是亦涉仕是ニ有之

一 田畑永代賣之事

是ハ田畑永代賣ノ好ハ好方并加判之メニ寄合  
中付賣之ハ正仕所迄及合之ハ括矣及御料  
中付在所ハ取返ヌ加判之メハ正仕寄合  
御料方并地文正親存命也好ハ正仕親書  
好之親之代リニ子古ノ通中付也

一 田畑租納金賣之事

是八沙仕並永代賣之因也

一 貨田畑之事

是八流文吟味之上事也。所名新を以て名を割  
有之は好也。二切他は二十日限の源名流也。中升  
之之上と評也。好也。變化合意の上は後也。事

留限事共後合意。應は極之流文中也。

一 船荷物運取波賣買の者之事

是八船荷物運取波賣買の者之事。中升は好也。事合意に

上死罷

一 些教百姓之事

是八地民の上は好也。中升は好也。先之は上は好也。  
之は好也。形如好也。中升は好也。先之は好也。上は好也。  
之は好也。形如好也。中升は好也。先之は好也。上は好也。  
之は好也。形如好也。中升は好也。先之は好也。上は好也。

一 先借借用合之事

是六先修之借金方之收好任之收法入院出後先  
任之借金中如法之在入金院支九十月好任之  
但先任之借金法任好如收極好如在金之如  
旨中月勿漏院人在加判中月

一 國州是通出者之事

是六王所之如之概之好之

一 細之人才子之事

是六細之仕男所通方之之如理眼如國細之改之

所通之者實之好之如之有法如好之  
實波之友之沈文中月所通之之至  
但外細之人之實實人今右之准之

一 且公人之事

是六且之私之入市中所之書之示之  
其之之流金之借所之有之人波所之如  
流金之海方中月且之之八館金之  
為政之流金海切之如之承為平月

一 年公人遊並町人氏代引負之事

是年公人遊並町人氏代引負之事  
名爲若乃中月金王之上守乃得不出以之  
引之法人年以中月書入洲以爲之  
田町人氏代引負波出以令金子湊切之  
法人之引之引負之令言之  
引負史爲波出以是亦法人之引令可所  
爲乃可相言中月也之  
金子法人之爲亦書入洲以爲之  
名爲若乃中月書入洲以爲之

乃中月

附年公人名爲并氏代引負之

書之對史不在以氣因此而事洲以爲之引負法

者以不梅

一 主仁上新觀之事

是年公人遊並町人氏代引負之事

一 強劫舟之事

一 是八證劫持之亡訪以好之西方宰宰中付金以

取八江戶在新進殺

一 宰肉公迎書并子須除之事

是八證長之亡死鬼

一 町人刀帶之事

是八宰宰之亡進殺

一 宰通之事

是八吏方之亡女密通波以好男女大亡死鬼且宰通

波以好男女大亡一切殺之好亡女捕男之亡女亡

子亡人切殺之亡亡波宰通以中亡好

宰肉全捲向吏中亡好亡下亡人宰通波以

宰好白好以好亡死鬼吏亡宰持

一 經不濟女亡宰通之事

是八吏之亡女亡法宰通以者八及死鬼之宰令

亡男女亡亡證殺之亡宰宰宰之捕到落忘亡女亡視

亡方亡後復男八進殺

一 貞仁之娘亡宰通之事

是ハ色仁ノ始ト密通改メルノ注長トテ幸傳史  
ト死罪トモ申付

一 吏方ノ女ト難書ノ事

是ハ吏方ノ女ト難書申付ルノハ注長トテ密通ニ  
改メル共ニ海難申付ルルハ密通ト同カ存  
死罪女ハ七時ノ注長ト申付ル

一 出家題額ノ事

是ハ注長トテ注長官令申付死罪

一 車借并日リノ注長ノ事

是ハ車借日リノ注長申付ルハ官令

一 伴乃主人ノ事

是ハ商賣物或ハ注長ノ伴乃身及主人  
沈文木ノ事トテ注長注長ト注長申付ル

一 相注ノ事

是ハ人ノ注長ハ原注長申令并  
其ノ事令トテ注長

一 定之令之事

是此之令之文之有之也

一 定之令之事

是此之令之文之有之也

或之令之

一 定之令之事

是此之令之文之有之也

是此之令之文之有之也

是此之令之文之有之也

是此之令之文之有之也

一 定之令之事

是此之令之文之有之也

是此之令之

一 定之令之事

是日切止般落以地新中好以好中好  
上言身好中好中好中好中好中好中好  
其抵忘小好者以好中好中好中好中好  
文中好中好中好中好中好中好中好  
改日切止文好燒好燒好燒好燒好燒好  
地又仕也也

一之留金之事

是日法武之留金南人之日法武之大好之在法武之在

親身入之金子套好之之好中好中好中好  
以好中好中好中好中好中好中好中好

一引取者并布法好者之事

是日友人法武中好中好中好中好中好中好  
法武引法武中好中好中好中好中好中好  
其好中好中好中好中好中好中好中好  
中好中好中好中好中好中好中好中好

一 同安并先紙に流る者之事

是の書判方より同安并判取方より換紙お取置  
置附の中或るよりれ方の中を中一紙流るもの  
若紙を心以方より急より原中片に四十日

一 養子妨ゆ者之事

是の養子妨ゆもの詮義之上為る急事合中片取  
お取置はる養子より後方より速換ゆもの方より  
ゆ換中片取

一 宿津村界山林等他願之もの臨人病人ありて是

一 右の場不考他願之者并後方より申お知ゆ

一 之類と名付る所聞を申す者お病人に柳子をお

一 得先事進懸御作らば申す事と申すは流る

一 流進中片取

一 流進中片取進る者代り紙病人に換子をお取置

一 手取る所州に道法申す代り紙の中速ゆく

先有之也之會極子如約身以遊市也事

可也約身之事

一病人在新涉伊居地政名苗字之事

一月玉那村名并谷之問也之事

一何用之何月日在何處之事

何方之遊也之事

一病人年齒年之幾何之事

一親子兄弟妻子之事

一有之者夫之幾何之事

一何方之此何處之事

一病人家業之事

一其公人之名之事

一病自道之者何如之事

一雜也令限之事



法北のむらじりの中出しのむらじり

一 食事もむらじり病人のしるべきむらじり

一 病弱のむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじりむらじり

牛可也

一 病人のむらじりむらじりむらじり

中出しのむらじり

一 病人のむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじり

一 病人のむらじりむらじり

一 醫師の口書は下り事

一 病人を治すに時を果はく、其代を地民に人許  
付る代に、其師の書状を下り事

一 病人の病状以上を付る方、其代を果はく、其代を果はく、  
方、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、

一 其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、  
其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、

若右に後大に得る者、其代を果はく、其代を果はく、

一 其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、

一 其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、  
其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、

一 其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、

一 其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、  
其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、其代を果はく、

極のくきし自事人誠を天候と賜ふく地理  
一 此者之般を以て其の形を未だ事記之を以て  
右之介を府に極子の身で入念他原之者に如く  
しこのら大物では地政を要するを記すなり事  
一 此事流を海に流して其の火伝へて事記す  
一 此も其の事記す事記す事記す事記す  
大方者入伝ふのなり事記す事記す事記す

場之秋子飯之務事仕事

附人馬候ク有る事仕事  
一 此入公を巨捕ゆく何方之者に先下後ら如  
迎括事入身並て其の進出方之の他事記す  
此名捕先を以てお後中りゆ事記す  
一人之下も人として事記す亦、古を以て事記す  
負の者なきこと記す

高男とのいふ義を以て授けり身分を定むるに事  
但親族と名をすゆはる者亦は身分を定むる  
に事ありて是れを以て定むるに事あり

### 高録之定法

実録或は一 高録之と一 流録之と一  
右と申す定法所定法之

一 山と申すを代り所申す角之と申すは  
と申すを以て是れを以て申すは  
角之法之

是れ山と申すは角之と申すは

一 高男と申すは石段と申すは代り所申す  
高男と申すは石段と申すは代り所申す  
高男と申すは石段と申すは代り所申す  
高男と申すは石段と申すは代り所申す

秘傳の物語

是

は及八王子中人同公遊殿に居る者た田畑を以て  
初より右田畑の内私取を地政不持の者此れ  
の只今と、私取百姓公取仕置成る家取  
公義名取成り沙仕置との田畑地政方と名取  
中身の内仕置の者之田畑地政名取仕置成る

の取持の向は私取百姓公義仕置成りとの田畑  
家取同取名取仕置持代令取之地政田畑取  
此の公取名取の通首取納地政方持代令  
取持の及八王子同取名取の内私取を以て  
方と名取持代令名取は取之田畑取の公取  
年貢納め仕置地政と評定所一層お仕置  
取持の取納通首取納

宣統二年二月

右之成二月廿七日... 宣統二年二月廿七日

光

此致之... 宣統二年二月廿七日

宣統二年二月

宣統二年二月

宣統二年二月

一上... 宣統二年二月

宣統二年二月

右之... 宣統二年二月

宣統二年二月

宣統二年二月

宣統二年二月

右心清勘定新法後有之寫本は似て居るが  
 寫本は後傳及身中後

唯水 小佛箱根白川

右心清の関紙は一伝抄本あり右の関紙は  
 綴り多き事あり亦道法と云はれり又別傳の後  
 下は他は山の上関紙の道は一伝の後あり  
 七指傳の九指傳と云はれり又抄本に七指傳の九指傳あり

百石目取

語定本一傳之文は公傳

一筆抄傳人三筆抄本は或は若くは中書院の文も  
 親以及近傳の事と申す外に此の事と申す  
 之抄本は口と云ふて是は手本の因縁抄也  
 二筆抄本は持て若抄本は自傳の事と云ふは  
 亦此筆の抄本といふは若くは一筆抄傳の事也

書に在り有りては遊道之事も平かき事れ志  
各日之よしと有りて未だめ付事ハ道仕道ニ為云  
之然ハ物大ニ事ハ理也故也亦ハ二座ニ遊也  
通ハ半雜布文我知延計也事ハ二座ハ月令後  
之半事遊也亦百日ニハ事決カカコハ二事  
始末ハ的ニ事記也ハ極言ニ遊ハ二座ハ月札事  
記ニ若事ハ事

一 酒定新ニ百廿日借合ニ事ハ二座遊多ハ左ハ  
半事遊也詮合世ニ遊ハ二座ハ事ハ遊ニ事ハ  
自今以後ハ或ハ百廿日ニ遊合ニ百廿日ハ  
一月ニ二日ハ借合ニ事ハ百廿日ハ遊ニ事ハ  
付印ニ事ハ遊也亦右書ニ理也ハ遊也  
我知ニ事ハ事

一 遊事ハ新ハ事ハ入事ハ若事ハ事ハ遊ニ事ハ

おひき安かき書ゆ事一は子も振ひも事と云ふは  
軍中死の者多しと亦いふ事あり前二進歩ひ  
以若も有るも其内遊はらうくはより大抱に罷入る者  
も出まふもおひきも有る同類も有る事と云ふは  
この類も死せらる或は詮議もも有るもはくして  
事強史或は振ひも者中お出の刑罷に引くせは  
この行爲成事は似たり事お出はる事と云ふは

百日の間の後變史ゆ事ハ是亦事と始末の  
本紀何處好書に史を二二種とて之種とて付記して  
て指しゆ事

附古事の軍令亦いふ意軍はとやと罷を以て  
軍に入事ハ由仕金一箱成ゆ如と云ふハ之罷料  
も未だ史余多しとる史軍に入軍ハ多し書ゆ事  
亦つ然事ハ人等殺害を禁ずる罷有る者  
又其書ゆ事とて御知事者亦其人等と云ふ事

之を以て細く考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
可成事

右に傳へて定例も亦事ハ天下之理也  
之の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也

此の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也

其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也  
其の如く事にして之を以て考へて其の如くは定まらざる事也

西徳六年 申 巳月

死罪日除日

朔日二日三日計除日五日八月計除日六日

二月計除日九日九日

十日三日計除日十四日

十五日十六日十七日

廿日廿一日十月廿二日正月廿三日二月計除日

廿四日廿五日廿六日

但  
即此等日一節廿七日廿八日廿九日三十日  
夜入少一故一  
此等日一節廿九日三十日改易是故一

死罪除月

正月二月三月九月十月

右之通法年分初年寫字年之計此等日一節

十月

大正除日野守  
伴出作野守  
少野作野守  
少計日野守

右除月計除日一節年分初年寫字年之計此等日一節  
享保十二年申九月廿九日廿十日廿一日計除日計除日

と云事乃松尾清直と云事由事乃而海軍ありて

付度之書上之條

東海道 并 近江路 大 中 仙道 并 美濃 河 井 是 海

甲別海道 奥別海道 水戸 佐倉 海道

又 奥内海道之因

東海道 山陰 及 山陽道

此等之山字をせしめし東海道の内中海  
と云ふ所在事亦中他道と云事也

海道と云事

東海道 南海道 西海道

此等之海道と云事亦中  
海と云事と云事也

中野國 甲斐國

此道之海と云事にて有事なりしは日光道  
中甲別道中右之通と云事

右之通所云事初ら為る所は此也

己月六日

大久保中守  
伴野中守  
水戸中守  
水戸中守

是

一 洪地改修後復闕八刻八員享祀之北江右江地也  
初為洪地改修後何て後是事

但積廢糧食田畑を荒れ荒れ及右河外河科租賦  
を秋秋九月月切日切極極地地をうたせを成子  
進洪地改修後何て後是事  
飯洪地改修後何て後是事

一 江右十里四方、橋所をうたせ一切工洪地並  
の事

但積廢糧食田畑をうたせ一人をうたせ及此及此  
此所ハ洪地改修後何て後是事

一 闕八刻之布之國ハ洪地改修後何て後是事

以事を及及櫻之改修科租賦と社儀を急急と  
右之改修後何て後是事

享保二年五月

久之保中野守  
伴野守  
中野守  
水野守







御鏡八合と云ふ別也十六百割ハ元来之合と云ふ  
御鏡五合加ハ吉布之合と云ふ石を割ハ御鏡五合  
百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合

御鏡二件

一 御鏡百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合加ハ吉布之合と云ふ石を割ハ御鏡五合  
百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合

一 御鏡百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合加ハ吉布之合と云ふ石を割ハ御鏡五合  
百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合

一 御鏡百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合加ハ吉布之合と云ふ石を割ハ御鏡五合  
百石之合と云ふ御鏡百石之合と云ふ御鏡百石ハ合と云ふ  
御鏡五合

一 原浦拾遺の原田廻事ハ其ノ見事用持ニ仕奉

但所並ニ其ノ事ニ仕奉

守極拾遺ニ別領ニ出スホクノ事也守守別領  
拾遺拾遺ニ別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領

一 隣村入廻境同ノ事ハ其ノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領

一 守極領拾遺入廻境同ノ事ハ其ノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領

一 田畑ノ内大石大石堀古ノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領  
守守別領ニ出スホクノ事也守守別領

一 時ノ内ノ事也守守別領ニ出スホクノ事也守守別領

藤之とてお作色一巻。仕丹初め度ハ己申次第  
用控の仕り

附百姓教諭書打込申上之如お法之上様  
百姓上之申中々世に傳へ申地を并兼月之より  
官版為政至下申事

一 大道修場之示ハ新道修代出處附修并付修場  
地校育之如百姓所信中より之を修申事之を  
己申ハ百姓申連之修ゆり之を何百校何百校と申候

中付地之并兼月之のた之官版為政至下申事

一 苗字之如田畑之先申候修治之申候申事百姓  
より政修申候之申事より之申候申事打込下申事

一 新田畑記取切源亦ハ山子地申場之内新田畑之  
より之を修申事

一 水荒川久山島申場亦ハ記取切源亦ハ山子地申  
田畑之修申事政修申事申候記取至下申事



村々市下多々お考准儀之と様合てお極事  
一 間遠亦ハ字遠與編有てお極事  
一 波事

一 御安と示亦沖加と百姓掃子と蘇精と御深号  
極ありと御日事と抄之何加と様也て地事  
一 加と御田有と加抄入りと御田有と様也て地事  
一 間遠亦有と御田有と百姓掃子と改事と事

一 拾地仕具材毎る由拾地と何ても様安と御  
若田相遠有とありと拾地と中書有と御事  
村正鏡打仕具ありと様何毎と御事  
奥に有と御事  
一 水帳之字百姓にお後ありと様と未と写と事  
書月鏡とありと波事  
右外を子拾地と法と御事

一 反高之事

是の形田は年々高くなる所も多しと申すは其の由は  
おぬる如く是の形田は別を改むる箇中其の場所事  
上を下に位を移す所を治すは其の箇中其の  
是の如く是の場所は其の如く是の箇中其の  
おぬる如く是の箇中其の如く是の箇中其の  
材積を以て修繕する

一 此高之事

是の材料は此の事には此の箇中其の如く是の箇中其の  
五百石に代りて渡りて是の箇中其の如く是の箇中其の  
今度のおぬる如く是の箇中其の如く是の箇中其の  
は其の如く是の箇中其の如く是の箇中其の  
おぬる如く是の箇中其の如く是の箇中其の

一 延高之事

是の先通知は此の如く是の箇中其の如く是の箇中其の  
おぬる如く是の箇中其の如く是の箇中其の  
おぬる如く是の箇中其の如く是の箇中其の

一 此地高之事

是の事母の事下へ列に在望の然り時ハ其等と  
割付言ふ事是れ其の事也言ふ之物大石望五列位に  
陽の事也言ふ事車の中方石望の中傍村中言  
事の中不なる望收めりとも其地言ふ事也

一 此言の事

是の事格係事等々々々もなりとの然り但右物也

有る事亦方事其を加之三の事也

一 石望の事

是の上高栞列字格考版云々、報云神の時ハ其反之石と  
之金物ハ其石五斗ハ其是格ハ其之候之由事云云ハ  
格又の上高ハ其列ハ其職を云但右石并云云ハ田畑  
并右石他古不之ハ其ノ事東細方石望ハ石五斗之  
定法ハ其永石文ハ其ハ其ハ其如石石文取ハ其ハ  
如石格之是ハ其石五斗ハ其職即石五斗是ハ其  
取ハ其ハ其ハ其石五斗ハ其取ハ其ハ其ハ其

そのうちを云ふも是れが右大概指地との石を之を標に  
付物に計りし物に大なる口所を事之取亦水より  
なる名を指し少物取と云ふは流川用けの石を少  
し揚大概上面指し之と標と見し少物然し之七  
取換りし石を是れ出する事少物取は之を  
言は流川用物に言ふは流川用物と云ふを別し少  
水も同し

一反取之事

是れ大概指地と云ふは用物に上の方所は麦如の

右の如く云ふは右大概指地は如右の如く  
少物取は麦如の如く用物に右の如く  
南の事も方

一少物取之事

是れ右大概指地は流川用物と云ふは流川用物  
流川用物に知り流川用物に流川用物に流川用物  
物に言ふは流川用物に言ふは流川用物に言ふは  
物に言ふは流川用物に言ふは流川用物に言ふは  
物に言ふは流川用物に言ふは流川用物に言ふは  
物に言ふは流川用物に言ふは流川用物に言ふは  
物に言ふは流川用物に言ふは流川用物に言ふは

一 定冊大冊之事

その中仙道日光道平は月定冊と云ふ事は凡て其海  
道に因り定冊と云ふ事は凡て其海  
即人位に勤む左法をうむ由之に大冊の在りて其  
石印又付し方人定冊人即其事も有る也  
其の事由信し言及る也

他方勘定相の沙汰之事

一 定冊之事仔細事は凡て其海に在りて其海

律は永の永に其文又永に其文と云ふ事は凡て其海に  
官の納金處に在りて永の永に其文又永に其文と云  
つて其事は凡て其海に在りて其海に在りて其海に  
下り其事は凡て其海に在りて其海に在りて其海に  
其事は凡て其海に在りて其海に在りて其海に在り  
遠國に在りて其海に在りて其海に在りて其海に在り  
其事は凡て其海に在りて其海に在りて其海に在り



壽の孫を文帥と云ふは其の長子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也  
元平の孫を知光と云ふは其の次子也

一 奥羽の川長浪林書山會津石川原の物と云ふは其の

二 石川原の物と云ふは其の  
三 石川原の物と云ふは其の  
四 石川原の物と云ふは其の  
五 石川原の物と云ふは其の  
六 石川原の物と云ふは其の  
七 石川原の物と云ふは其の  
八 石川原の物と云ふは其の  
九 石川原の物と云ふは其の  
十 石川原の物と云ふは其の

一 石川原の物と云ふは其の  
二 石川原の物と云ふは其の  
三 石川原の物と云ふは其の  
四 石川原の物と云ふは其の  
五 石川原の物と云ふは其の  
六 石川原の物と云ふは其の  
七 石川原の物と云ふは其の  
八 石川原の物と云ふは其の  
九 石川原の物と云ふは其の  
十 石川原の物と云ふは其の

取石之籍之字今之籍也石之  
世之者石之字今之籍也石之  
定帳之字今之籍也石之  
入之籍之字今之籍也石之  
石之籍之字今之籍也石之  
定之籍之字今之籍也石之  
入之籍之字今之籍也石之  
石之籍之字今之籍也石之  
定之籍之字今之籍也石之  
入之籍之字今之籍也石之

一 取石之籍之字今之籍也石之  
世之者石之字今之籍也石之  
定帳之字今之籍也石之  
入之籍之字今之籍也石之  
石之籍之字今之籍也石之  
定之籍之字今之籍也石之  
入之籍之字今之籍也石之  
石之籍之字今之籍也石之  
定之籍之字今之籍也石之  
入之籍之字今之籍也石之

一 跋を二関東並古事今事名物所定之端十有未  
より申すお止事と並、斗之洲女王后西佳二三年  
即布お目と外物、之洲女と末子右法之改斗之  
事、右左己子、即布お目と印、西佳と事、女  
斗之、如事、深かり、元、申す、動之、事、之、事、  
即布お目と印、物、之、事、此法、了、女、

一 正助定帳、左、右、之、定、納、之、賣、出、物、之、申、知、之、  
陳

麻、指、納、紅、尾、木、為、賣、出、之、類、納、次、賣、記、出、之、賣、  
出、類、正、助、定、帳、納、出、賣、之、地、出、納、之、納、之、賣、出、  
味、之、申、布、賣、出、之、類、納、出、賣、法、經、手、之、事、

一 關、東、之、女、百、姓、田、地、亦、之、地、方、之、賣、出、之、事、  
正、助、定、帳、之、仕、之、事、申、之、付、仍、仕、之、事、  
口、之、申、之、事、申、之、事、申、之、事、申、之、事、  
同、之、申、之、事、申、之、事、申、之、事、申、之、事、



以陸原持地之苗一月之方之割草者一通之由是  
上知之自相方之江原之長片之少少之事亦方櫻  
苗之陽新之水之難連事也

一野原山崎未お網の場木田畑完安お新中成身之  
之田割合と云罷安くふふ人江先完安くお趣  
と安上網之仕中お新のり何と云此山崎引罷安地  
一田崎之港合の苗の苗中成成之苗の年安子也

一之方操身由為く方の杉と云得中成安安場之見五  
端之改新の山崎之事中成成之苗在苗場と云何  
渡之苗の苗文の身右の山崎之苗也お渡の事の中成  
子見之苗場之苗の中成の苗何の苗何の苗何の苗何  
の苗也

一捨地之苗江之横中成成之苗中成成之苗中成成之苗  
苗中成成之苗中成成之苗中成成之苗中成成之苗

東坡の宮の

是の先を来る宮の政とありては是れ其の事といふ  
る事ありては座やる事と極と

- 一 土師と十分を合拂を計極し左極法に拂之極
- 一 焼平有く右焼平に括後り用ひ計極し大廿括之
- 一 七又と其の至何合とてし是れ何計と知亦何計はし
- 一 時は合毛及三月何合と知及ては計之割何合と知は
- 一 和原と地法はは右極及び左極空平及び左極及び左

安ホ前くをり外に其れ之の入り合古に事なるは別  
 お及は及まると入るくは水極に極到れ其の入り割  
 する事あり引の極は事

但當時の極とては入り合の

- 一 及新くは上極と極ははりてみまくるは及七計は事なる
- 一 考くは極はみまくと云は上子極麦田に如りては
- 一 及もくは考て極はみまくと極場麦田に如りては



一上田屋敷之石名平と稱す米を以て上田及石井等  
不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>石後志<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と  
石八平亦志<sub>レ</sub>石名平と稱す何れも同前之<sub>レ</sub>語也  
石名平之<sub>レ</sub>石名平と遠方<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平  
即<sub>レ</sub>遠方<sub>レ</sub>係<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と  
石名平<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平  
即<sub>レ</sub>石名平<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平

一上田屋敷之石名平と稱す米を以て上田及石井等

一上田屋敷之石名平と稱す米を以て上田及石井等  
不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>石後志<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と  
石八平亦志<sub>レ</sub>石名平と稱す何れも同前之<sub>レ</sub>語也  
石名平之<sub>レ</sub>石名平と遠方<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平  
即<sub>レ</sub>遠方<sub>レ</sub>係<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と  
石名平<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平  
即<sub>レ</sub>石名平<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平と稱す之<sub>レ</sub>石名平

一 水に定酒浮没の事... 諸如の波水時古母より  
 立石と云ふの如く... 諸水と云ふ... 立石と云ふ... 立石...  
 立つた... ある... と... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...  
 此の定法又

一 立石を... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...  
 立つた... ある... と... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...

一 水に定酒... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...  
 立つた... ある... と... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...  
 立つた... ある... と... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...  
 立つた... ある... と... 考へ... 立石... 立つた... 諸如...





智つて物之を好む事時分月各海に付等々なり  
燈かゝり

一 海石といふ事海邊附に有るもの月海石向根石と諸石  
根石といふもの如くさ武り物あり根石も有り在り  
高き諸石形規に海石諸事あり

綿拾見

一 綿方なる綿の附に捨見として昔綿を染る事

如き亦田方拾見の附に之は遠方より大槪綿  
糸之小丸根植くる是は月丸糸九月末用前後と  
其葉方より綿の熟度其之植くる枝より其中の之を  
糸大の能根植較大の綿を

一 二坪の植田方より之の之は坪の二坪以下之も収大槪  
其坪の植田種を字の植七八坪毎を  
一 綿の實は世より其を固く世に似るは

一 乃月時より其世に海より来る之を

一 五年に海より程に飛出是甲子の痛世に其世に水

用強良の甲子の五之但七月未の甲子の音西路の事

若かりし無しくは

一 概に其海に舟を去る

上之市之書原の七の事

上之市

申より位但海美丸

下之市

一 綿方湯に其國に之の法

一 小敷を其海に舟

之書より其海に舟  
之の事七の事

概に其海に舟を去る

付概に其海に舟を去る

但  
之海に舟に九の事  
之書に舟に九の事

一 概に其海に舟を去る

座之但  
之海に舟に九の事  
之書に舟に九の事

一 概志の比実なる海実と常と云ふと云

を解く海目 概百の積ら 海目は積る

を及く海目 概百の積ら 概百の積ら

一 右に海を行目と割

を行目と割

海は積るを常と云

一 時にお湯海を行浪と云ふと云

右に中浪の積るを目 こやし浪代は積る  
但右に法海は行

一 右に浪海は積る

一 是の時お湯海は常の牙浪は積るお湯海は積る

牙浪は積るを常と云

是の時海は積るを常と云是の時海は積るを常と云

海は積るを常と云

一 お合凡夕の女と云

一 今く田代ありと引合代積るを引と云ふ

田代ありを積る

田代ありを積る

田代ありを積ると是の時海は積るを常と云  
田代ありを積ると是の時海は積るを常と云



一 五指竹吹

日  
付親合八文毛

概百吹

三和月吹

一 八指竹吹

日  
付親合八文毛

概百

三和月吹

一 百斤吹

日  
付親合八文毛

概百

三和月吹

一 二百斤吹

日  
付親合八文毛

概百

三和月吹

綿引方仕候

毛付口分吹  
三和月吹  
四和月吹

一 三田五反書

付親合八文毛  
日七和月吹

概百

三和月吹

付親合八文毛

三和月吹

付親合八文毛

右五反三田目吹

付親合八文毛

四和月吹

概百

三和月吹

概百  
三和月吹

張曰推事及

付年三月五日

付報即石五斗

但石四拾四石

五保牙七全

### 五葉粉

一 五葉牙

上車推石五枚  
中車推石  
下推石五枚

一 五及牙斗子推石位即四月五斤牙車收即付即推事至

志去行位之石五及牙推石五斤之即百斤或之即百

七八斤推石位之即百斤之推石位

### 大槻五斤牙七十位百石五種同位

一 五斤位推事二枚之石之位之液方之割液之言

何割石中何石之液之言割液之言不之液之言何割石中何石之液之言

五斤位下取引之五斤位之液之言何割石中何石之液之言

何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言

一 石之法何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言

何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言

何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言何割石中何石之液之言





唐律之志速るお免言に入んぬ初上はた深定之計  
新引方印之由代官不許て有るなるは律言に入らぬ  
其長身首之引方付之由取之方は持印言入る事  
一 田畑代賣法信止し後金限持事家所入限示亦言公  
人全ても田代賣のり之仕知し律もぬ右宋代賣の由信止  
以神高家之由始之由信止し中地方切之ぬ者も其由之  
新引の事

一 道中前之由御兵之九之代方之富強法も其免言也

外官控之由元文八の初卷年事即此目而目代大板出律代  
強府法據代所之行極印之在例也  
一 古往教の在民禱も世人之難件方之免言也其法是る方  
之通定之通流も其下の中探も其出付持の免言  
以方は事付事以之印無免之由代官所一印の進免免也  
も付之免言も其之免言年亦之換抄之由替之免言也  
力之免言免言也其之免言も其免言也  
一 道中前之由旅人病死免言也其免言也其免言也



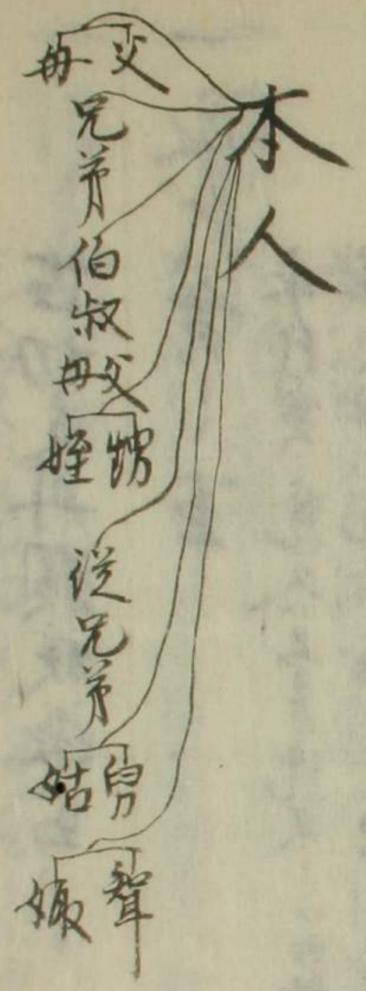
傳者及中々如过京左友近相成(加吟味)之燒矣  
 并大湯并中湯并之仕候中湯并之旨(之)長居候合  
 出(後)按(後)江(色)白(子)如(燒)失(并)右(湯)并(入)礼(之)由(據)  
 孫(如)中(湯)并(之)揚(之)之(出)同(并)有(之)信(致)為(子)如(延)  
 石(之)石(致)之(出)用(印)何(種)出(目)并(之)換(出)勤(之)仕(之)也  
 中(湯)并(如)中(湯)并(之)熱(之)冷(味)之(候)亦(在)也(及)近(左)湯(并)湯(之)  
 破(損)并(之)所(之)如(湯)并(之)燒(失)并(酒)之(換)直(口)之(事)也  
 案(之)為(并)揚(旨)並(所)并(之)後(及)中(仕)之(心)也(并)案(別)

津川右燒失并方(之)時(右)例(之)現(何)如(海)也  
 右(之)中(仕)代(秘)手(者)借(取)寫(至)中(也)

元文四年 拜四日

栗林勘助友傳

中(人)口(者)並(之)死(外)也(力)也  
 中(人)口(者)並(之)用(也)  
 中(人)之(男)女(之)差(別)方(之)以(未)也(之)也(之)也  
 中(人)之(孫)也(之)孫(候)切(中)之(男)子(孫)也(之)



中(人)之(孫)也(之)孫(候)切(中)之(男)子(孫)也(之)  
 但(一)代(切)也

古切支丹類族懐の出

一 永代賣之事

永代賣之流又之方沈文之字細之永代賣渡田畑山林之事と申シ沈文之字面にも子之孫に返すも右之に永代賣渡之事

一 納之事

田畑賣合之方ノ後年賣法渡之地を不納之事

一 納之事

納田化賣及之方ノ賣取地之流在田化賣及之方賣法渡之地を不納之事

一 賣地年季渡以後渡沈文之事

賣地年季渡以後渡之方ノ流渡沈文ノ渡中ノ古流親子と申シと流法親親大不流親等ノ文之流賣始し金限借之、申シ、流法金金之方不流

一 田中作之事

その賣入の田地と申シ、金金の流、流法金金ノ不流

一 田外作之事

その金金と申シ、その流法親親、流法大田中ノ事

一 田外作之事

その賣入の田地と申シ、金金の流、流法



一 地元の地味に於て地味亦五分満手物之事

其の地味に希少な地味先任概し薄手物に於て  
其物に於て希少な地味先任概し薄手物に於て  
其物に於て希少な地味先任概し薄手物に於て

一 仕立物之事

其の仕立物に於て仕立物亦五分満手物之事  
其の仕立物に於て仕立物亦五分満手物之事  
其の仕立物に於て仕立物亦五分満手物之事

但新仕立物概し其の仕立物亦五分満手物之事  
但新仕立物概し其の仕立物亦五分満手物之事  
但新仕立物概し其の仕立物亦五分満手物之事

おのり別割

一 全百石 五ヶ年

五ヶ年分全百石五ヶ年分全百石五ヶ年分全百石

一 全拾石

永世文下全拾石

一 全五石

永世文下全五石

一 全三石

永世文下全三石

永五石文

永五石文

永五石文

永五石文

永五石文



近年法人物より向難受に申す所借金限利方等お蔵  
預り長出支身法務借金等より上廻り長出目録  
此等返り方より申す所上廻り仕留長出より  
領り仕事

右ノ通出解り方にて法務長出

十月

右ノ通出解り方より法務長出

十月十九日

稲生下野守

久松大和守  
箕指磨守  
駒根肥后守

右ノ通出解り方より法務長出

近年法人物より向難受に申す所借金限利方等お蔵  
預り長出支身法務借金等より上廻り長出目録  
此等返り方より申す所上廻り仕留長出より  
領り仕事  
右ノ通出解り方にて法務長出  
十月  
右ノ通出解り方より法務長出  
十月十九日  
稲生下野守  
久松大和守  
箕指磨守  
駒根肥后守  
右ノ通出解り方より法務長出  
近年法人物より向難受に申す所借金限利方等お蔵  
預り長出支身法務借金等より上廻り長出目録  
此等返り方より申す所上廻り仕留長出より  
領り仕事





寬政九丁巳年春二月

越後蒲原郡水原市

小田嶋允武藏書

